

日本航海学会誌

# NAVIGATION

21世紀の新しい針路を求めて

---

静水圧の圧力積分による船の浮心位置の決定

— その3 : 半没円柱に対する証明 —

堀 勉

*A Positioning on Ship's Centre of Buoyancy  
Derived by Surface Integral of Hydrostatic Pressure  
— Part 3 : The Proof for Semi-submerged Circular Cylinder —*

*Tsutomu HORI*

---

平成31年

4月

第208号



## 研究・調査

# 静水圧の圧力積分による船の浮心位置の決定

## — その3 : 半没円柱に対する証明 —

堀 勉

### A Positioning on Ship's Centre of Buoyancy Derived by Surface Integral of Hydrostatic Pressure — Part 3 : The Proof for Semi-submerged Circular Cylinder —

Tsutomu HORI

**キーワード:** 浮心, 圧力中心, 静水圧, 半没円柱, 矩形断面

#### 1. はじめに

船に作用する浮力の中心「浮心」は、水面下の体積（排水体積）を水で置き換えた重心（即ち、水面下の幾何学的形状の体積中心）に等しいことは、造船学上、否、物理学上の周知の事実である。

Archimedes の原理<sup>(1)</sup>が教える浮力は、静水圧の圧力積分によって明かに求められるが、浮心位置については、物理学や水理学、造船学や航海力学など、どの教科書（例えば、第1報<sup>(2)</sup>の参考文献(2)~(16)）にも、水面下の体積を水で置き換えた重心位置であると記述されていて、静水圧による圧力中心としての説明は見当たらない。

そんな状況の中、10年ほど前、小松<sup>(3)</sup>によって、「浮心≠圧力中心？」の問題提起が成され、日本船舶海洋工学会の推進性能・運動性能合同研究会等でも、瀬戸<sup>(4),(5)</sup>、鈴木(勝)<sup>(6)</sup>、小松<sup>(7)</sup>、藪下<sup>(8)</sup>、慎<sup>(9)</sup>らによって、活発に議論が成された。

この問題に対して、著者は、この航海学会誌上で、第1報<sup>(2)</sup>と第2報<sup>(10)</sup>において、船を $\theta$ だけ横傾斜させた状態で、静水圧を圧力積分して、作用する力とモーメントを計算することにより、傾斜時の圧力中心を決定した。その結果を、 $\theta \rightarrow 0$ とすることで、圧力中心が、水面下の図心、即ち、周知の浮心に位置することを、矩形断面<sup>(2)</sup>に続いて、任意の横断面形状<sup>(10)</sup>について証明した。

この問題については、一色<sup>(11)</sup>や藪下<sup>(12)</sup>は、重力の作用方向を、鉛直方向から傾斜させることにより、「浮心=圧力中心」であることを示した。その後、藪下<sup>(13)</sup>は、浮体や重力の作用方向を傾斜させるのではなく、座標系を回転させることで、同様の結論が得られることを示した。一方、鈴木(勝)<sup>(14)</sup>や小松<sup>(15)</sup>が、種々のアプローチで、この問題に対して検討を加える中、著者の証明<sup>(16)</sup>に対しても、半没円柱の場合でも、同様の結論でしょうか？とのご意見が、何人かの先生方から寄せられた。

半没円柱の場合も、第2報<sup>(10)</sup>の任意形状の証明に含まれるものであるが、矩形と共に典型的な断面形状であるので、ここに改めて第3報として、ご報告させて頂く次第である。

#### 2. 半没円柱の圧力中心 $C_p$ の位置決め

図1は、半径  $R$  の半没円柱（幅  $2R$ 、吃水  $R$ ）の横断面が、右舷側に  $\theta$  だけ横傾斜した場合を示す。静水面中央に原点  $o$  を置き、 $z$  軸を鉛直下向きに取った空間固定座標系を  $o-yz$ 、円柱に固定した座標系を  $o-\eta\zeta$  とする。

$\zeta$  軸から反時計方向に測った偏角を  $\phi$  とするとき、図中に示すように、左舷側の水面位置の偏角  $\phi_L$  と、右舷側の水面の偏角  $\phi_R$  は、それぞれ、

$$\left. \begin{aligned} \phi_L &= -\frac{\pi}{2} + \theta \\ \phi_R &= \frac{\pi}{2} + \theta \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(1)$$

となる。このとき、空中部  $C_{air}$  と没水部  $C_{water}$  は、偏角  $\phi$  で記述すると、それぞれ、

$$\left. \begin{aligned} C_{air} &: \frac{\pi}{2} + \theta \leq \phi \leq \frac{3\pi}{2} + \theta \\ C_{water} &: -\frac{\pi}{2} + \theta \leq \phi \leq \frac{\pi}{2} + \theta \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(2)$$

である。円柱表面  $(\eta, \zeta) = (R \sin \phi, R \cos \phi)$  での水深  $z(\phi)$  は、

$$\begin{aligned} z(\phi) &= (\zeta + \eta \tan \theta) \cos \theta \\ &= (R \cos \phi + R \sin \phi \cdot \tan \theta) \cos \theta \\ &= R(\cos \theta \cos \phi + \sin \theta \sin \phi) \quad \dots\dots\dots(3) \end{aligned}$$

である。このとき、円柱表面に立てた、外向きの

単位法線ベクトル  $\mathbf{n}$  は、偏角  $\phi$  を使って、

$$\begin{aligned} \mathbf{n} &= n_\eta \mathbf{j} + n_\zeta \mathbf{k} \\ &= \sin \phi \mathbf{j} + \cos \phi \mathbf{k} \quad \dots\dots\dots(4) \end{aligned}$$

のように書ける。ここに、 $n_\eta, n_\zeta$  は、それぞれ、円柱固定座標  $\eta, \zeta$  に対する方向余弦を意味する。

大気圧を  $p_0$ 、水の比重量を  $\gamma$  とし、図1で、大気圧を破線、静水圧  $\gamma z$  を実線のベクトルで示していて、全て、円柱表面に対して垂直な  $-\mathbf{n}$  方向に作用する。

### 2.1 円柱表面に働く圧力による力

円柱表面に働く、圧力による  $-\eta$  方向の力  $F_{-\eta}$  と  $-\zeta$  方向の力  $F_{-\zeta}$  は、空中部  $C_{air}$  に働く大気圧  $p_0$  による力と、没水部  $C_{water}$  に働く静水圧  $p_0 + \gamma z$  による力の和で、それぞれ、

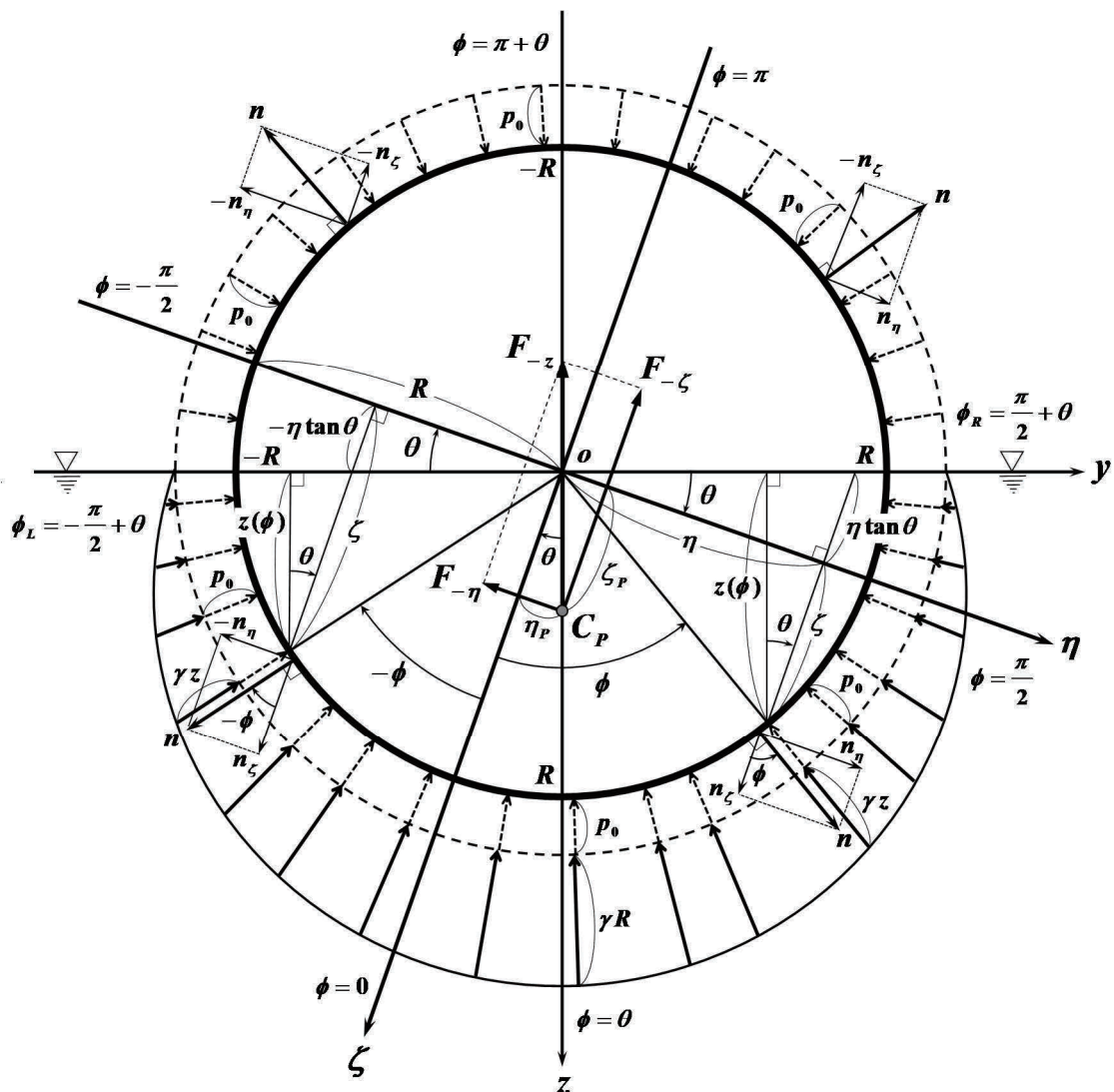


図1 横傾斜した半没円柱に作用する静水圧の分布と圧力中心

$$\left. \begin{aligned} F_{-\eta} &= \int_{C_{air}} p_0 n_\eta d\ell + \int_{C_{water}} (p_0 + \gamma z) n_\eta d\ell \\ F_{-\zeta} &= \int_{C_{air}} p_0 n_\zeta d\ell + \int_{C_{water}} (p_0 + \gamma z) n_\zeta d\ell \end{aligned} \right\} \dots(5)$$

によって求まる。ここに、円柱表面では、線素は  $d\ell = R d\phi$ 、 $\eta$  方向と  $\zeta$  方向の方向余弦は、(4)式により  $n_\eta = \sin \phi$ 、 $n_\zeta = \cos \phi$  と書けるから、 $C_{air}$ 、 $C_{water}$  それぞれに対し、(2)式の区間で、偏角  $\phi$  に関する積分で表記できる。

実際、 $-\eta$  方向に働く  $F_{-\eta}$  は、

$$\begin{aligned} F_{-\eta} &= \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} p_0 \sin \phi \cdot R d\phi + \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} (p_0 + \gamma z) \sin \phi \cdot R d\phi \\ &= p_0 R \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} \sin \phi d\phi + \gamma R \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} z \sin \phi d\phi \\ &= \gamma R \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} z(\phi) \sin \phi d\phi \dots\dots\dots(6) \end{aligned}$$

のように、 $-\zeta$  方向に働く  $F_{-\zeta}$  は、

$$\begin{aligned} F_{-\zeta} &= \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} p_0 \cos \phi \cdot R d\phi + \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} (p_0 + \gamma z) \cos \phi \cdot R d\phi \\ &= p_0 R \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} \cos \phi d\phi + \gamma R \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} z \cos \phi d\phi \\ &= \gamma R \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} z(\phi) \cos \phi d\phi \dots\dots\dots(7) \end{aligned}$$

となり、 $F_{-\eta}$ 、 $F_{-\zeta}$  とともに、第 1 項の大気圧  $p_0$  に関する円柱表面の全周に亙る積分はゼロとなり、力に寄与しないことが分かる。よって、第 2 項の水深  $z(\phi)$  に、(3)式を用いて計算すればよいことになり、 $F_{-\eta}$  は、

$$\begin{aligned} F_{-\eta} &= \gamma R^2 \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} (\cos \theta \cos \phi + \sin \theta \sin \phi) \sin \phi d\phi \\ &= \gamma R^2 \left\{ \cos \theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} \sin \phi \cos \phi d\phi \right. \\ &\quad \left. + \sin \theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} \sin^2 \phi d\phi \right\} \\ &= \frac{1}{2} \gamma R^2 \left\{ \cos \theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} \sin 2\phi d\phi \right. \\ &\quad \left. + \sin \theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} (1 - \cos 2\phi) d\phi \right\} \\ &= \gamma \frac{\pi R^2}{2} \sin \theta \dots\dots\dots(8) \end{aligned}$$

となり、 $F_{-\zeta}$  は、

$$\begin{aligned} F_{-\zeta} &= \gamma R^2 \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} (\cos \theta \cos \phi + \sin \theta \sin \phi) \cos \phi d\phi \\ &= \gamma R^2 \left\{ \cos \theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} \cos^2 \phi d\phi \right. \\ &\quad \left. + \sin \theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} \sin \phi \cos \phi d\phi \right\} \\ &= \frac{1}{2} \gamma R^2 \left\{ \cos \theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} (1 + \cos 2\phi) d\phi \right. \\ &\quad \left. + \sin \theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} \sin 2\phi d\phi \right\} \\ &= \gamma \frac{\pi R^2}{2} \cos \theta \dots\dots\dots(9) \end{aligned}$$

のように、求まる。両式中で、 $\sin 2\phi$  の積分値はゼロ、 $(1 \mp \cos 2\phi)$  の積分値は  $\pi$  となるからである。

### 2.2 円柱表面に働く圧力によるモーメント

円柱表面に働く  $-\eta$  方向の圧力による、原点  $o$  に関する時計回りのモーメント  $M_\eta$  と、 $-\zeta$  方向の圧力による、反時計回りのモーメント  $M_\zeta$  は、それぞれ、(5)式にモーメントのレバーとして、 $\zeta$  或いは  $\eta$  を乗じて積分することにより、

$$\left. \begin{aligned} M_\eta &= \int_{C_{air}} p_0 \zeta n_\eta d\ell + \int_{C_{water}} (p_0 + \gamma z) \zeta n_\eta d\ell \\ M_\zeta &= \int_{C_{air}} p_0 \eta n_\zeta d\ell + \int_{C_{water}} (p_0 + \gamma z) \eta n_\zeta d\ell \end{aligned} \right\} (10)$$

によって求め得る。ここに、前節の  $F_{-\eta}$ 、 $F_{-\zeta}$  に対する(6),(7)両式と同様に、偏角  $\phi$  に関する積分で表記すれば、 $M_\eta$  は、

$$\begin{aligned} M_\eta &= \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} p_0 \sin \phi \cdot R \cos \phi \cdot R d\phi \\ &\quad + \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} (p_0 + \gamma z) \sin \phi \cdot R \cos \phi \cdot R d\phi \\ &= \frac{1}{2} p_0 R^2 \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} \sin 2\phi d\phi \\ &\quad + \gamma R^2 \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} z \sin \phi \cos \phi d\phi \\ &= \gamma R^2 \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} z(\phi) \sin \phi \cos \phi d\phi \dots\dots\dots(11) \end{aligned}$$

となり、 $M_\zeta$  は、

$$\begin{aligned}
 M_\zeta &= \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} p_0 \cos\phi \cdot R \sin\phi \cdot R d\phi \\
 &\quad + \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} (p_0 + \gamma z) \cos\phi \cdot R \sin\phi \cdot R d\phi \\
 &= \frac{1}{2} p_0 R^2 \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} \sin 2\phi d\phi \\
 &\quad + \gamma R^2 \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} z \sin\phi \cos\phi d\phi \\
 &= \gamma R^2 \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} z(\phi) \sin\phi \cos\phi d\phi \quad \dots\dots\dots(12)
 \end{aligned}$$

となることから、 $M_\eta, M_\zeta$ に関する両式は、同値となることが分かった。

(11),(12)式ともに、第1項の大気圧  $p_0$ に関する  $\sin 2\phi$ の積分はゼロとなり、第2項の水深  $z(\phi)$ に、(3)式を用いることにより、

$$\begin{aligned}
 M_\eta &= M_\zeta \\
 &= \gamma R^3 \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} (\cos\theta \cos\phi + \sin\theta \sin\phi) \\
 &\quad \times \sin\phi \cos\phi d\phi \\
 &= \gamma R^3 \left\{ \cos\theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} \sin\phi \cos^2\phi d\phi \right. \\
 &\quad \left. + \sin\theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} \sin^2\phi \cos\phi d\phi \right\} \dots\dots\dots(13)
 \end{aligned}$$

を計算すればよいことになる。実際、第1項は  $p = \cos\phi$ 、第2項は  $q = \sin\phi$ と置いて、それぞれ置換積分すれば、

$$\begin{aligned}
 M_\eta &= M_\zeta \\
 &= 2\gamma R^3 \left( \cos\theta \int_0^{\sin\theta} p^2 dp + \sin\theta \int_0^{\cos\theta} q^2 dq \right) \\
 &= 2\gamma R^3 \left( \cos\theta \cdot \frac{1}{3} \sin^3\theta + \sin\theta \cdot \frac{1}{3} \cos^3\theta \right) \\
 &= \frac{2}{3} \gamma R^3 \sin\theta \cos\theta (\sin^2\theta + \cos^2\theta) \\
 &= \frac{2}{3} \gamma R^3 \sin\theta \cos\theta \quad \dots\dots\dots(14)
 \end{aligned}$$

のように、求まる。

### 2.3 -y 方向と -z 方向の合力 $F_{-y}, F_{-z}$

2.1節(8),(9)式で求めた  $F_{-\eta}, F_{-\zeta}$ を用いて、水平成分の  $F_{-y}$ と、鉛直成分の  $F_{-z}$ を求めると、

$$\left. \begin{aligned}
 F_{-y} &= F_{-\eta} \cos\theta - F_{-\zeta} \sin\theta \\
 &= \gamma \frac{\pi R^2}{2} (\sin\theta \cdot \cos\theta - \cos\theta \cdot \sin\theta) = 0 \\
 F_{-z} &= F_{-\zeta} \cos\theta + F_{-\eta} \sin\theta \\
 &= \gamma \frac{\pi R^2}{2} (\cos^2\theta + \sin^2\theta) = \gamma \frac{\pi R^2}{2}
 \end{aligned} \right\} (15)$$

のように、圧力積分による合力として、水平成分  $F_{-y}$ は生じないことが分かる。

鉛直成分  $F_{-z}$ は、水の比重量  $\gamma$ と水面下の半円の面積  $\frac{\pi R^2}{2}$ の積となっていて、Archimedesの原理<sup>(1)</sup>が教える通り、鉛直上向きに生じる浮力そのものである。

### 2.4 半没水円柱の圧力中心 $C_p$ の位置決め

圧力中心  $C_p$ を円柱固定の  $o-\eta\zeta$ 座標系で、位置決めするには、第1報<sup>(1)</sup>、第2報<sup>(10)</sup>と同様に、大串<sup>(17)</sup>が用いた水理学の手法に基づいて、 $\eta$ 座標  $\eta_p$ は、 $-\zeta$ 方向の圧力による合力  $F_{-\zeta}$ とモーメント  $M_\zeta$ により、(9),(14)式を用いて、

$$\begin{aligned}
 \eta_p &= \frac{M_\zeta}{F_{-\zeta}} = \frac{\frac{2}{3} \gamma R^3 \sin\theta \cos\theta}{\gamma \frac{\pi R^2}{2} \cos\theta} \\
 &= \frac{4}{3\pi} R \sin\theta \quad \dots\dots\dots(16)
 \end{aligned}$$

のように、 $\zeta$ 座標  $\zeta_p$ は、 $-\eta$ 方向の圧力による  $F_{-\eta}$ と  $M_\eta$ により、(8),(14)式を用いて、

$$\begin{aligned}
 \zeta_p &= \frac{M_\eta}{F_{-\eta}} = \frac{\frac{2}{3} \gamma R^3 \sin\theta \cos\theta}{\gamma \frac{\pi R^2}{2} \sin\theta} \\
 &= \frac{4}{3\pi} R \cos\theta \quad \dots\dots\dots(17)
 \end{aligned}$$

のように計算することができ、

$$(\eta_p, \zeta_p) = \left( \frac{4}{3\pi} R \sin\theta, \frac{4}{3\pi} R \cos\theta \right) \quad \dots\dots(18)$$

のように決定される。この円柱固定座標での  $(\eta_p, \zeta_p)$ を、空間固定座標の  $(y_p, z_p)$ に変換すると、

$$\left. \begin{aligned} y_p &= \eta_p \cos \theta - \zeta_p \sin \theta \\ &= \frac{4}{3\pi} R (\sin \theta \cdot \cos \theta - \cos \theta \cdot \sin \theta) = 0 \\ z_p &= \zeta_p \cos \theta + \eta_p \sin \theta \\ &= \frac{4}{3\pi} R (\cos^2 \theta + \sin^2 \theta) = \frac{4}{3\pi} R \end{aligned} \right\} \dots(19)$$

のように計算され、

$$(y_p, z_p) = \left( 0, \frac{4}{3\pi} R \right) \dots\dots\dots(20)$$

となる。これは、正しく水面下の半円のセンターライン ( $z$  軸) の図心位置を示しており、第 2 報の任意の断面形状に対して得られた結論<sup>(10)</sup>と一致する。これによって、半没円柱についても、圧力中心が、周知の浮心位置であることを、証明できた。

**2.5 考察**

本章の半没円柱の場合は、矩形 (第 1 報<sup>(2)</sup>) や任意の断面形状 (第 2 報<sup>(10)</sup>) の場合と状況が異なり、横傾斜させても、水面下の幾何学的形状が、変化しないことである。結果、横傾斜角  $\theta \rightarrow 0$  として、直立時の圧力中心を求める必要がなく、前節(20)式のように、圧力中心の位置を定め得た。

このことは、藪下ら<sup>(13)</sup>が主唱するように、浮体を横傾斜させることなく、座標系を回転させて、鉛直方向からズラすことにより、鉛直方向の浮心位置を決め得ることを、例証している。

**3. 矩形断面に対する別証明**

2.5 節の考察を踏まえて、第 1 報<sup>(2)</sup>の矩形断面の場合に対して、浮体を傾斜させることなく、座標系を回転させる手法で、圧力中心の位置決めを試みる。

図 2 は、幅  $2b$ 、深さ  $f+h$  (吃水  $f$ 、乾舷  $h$ ) の 2 次元 矩形断面が、直立状態で浮いている場合を示す。底面中央に原点  $o$  を置き、水平方向と鉛直上向きに取った座標系を  $o-yz$ 、原点  $o$  を中心に、時計回りに  $\theta$  だけ回転させた座標系を  $o-\eta\zeta$  とする。

図 1 と同様、大気圧を破線、静水圧を実線、それぞれの圧力を細線、力を太線のベクトルで示し

ていて、全て、浮体表面に対して垂直方向に作用する。

**3.1 浮体表面に働く圧力による力**

左舷 (*Left*)、右舷 (*Right*) に働く力  $P_{Left}, P_{Right}$  は、それぞれ舷側全体に働く一様分布の大気圧による  $P_{Left}^{(0)}, P_{Right}^{(0)}$  と、没水部に働く三角形分布の静水圧による  $P_{Left}^{(\gamma)}, P_{Right}^{(\gamma)}$  の和で求まる。ここに、2 章と同じく、大気圧を  $p_0$ 、水の比重量を  $\gamma$  とすれば、

$$\left. \begin{aligned} P_{Left} &= P_{Left}^{(0)} + P_{Left}^{(\gamma)} \\ &= p_0(f+h) + \frac{1}{2} \gamma f^2 \\ P_{Right} &= P_{Right}^{(0)} + P_{Right}^{(\gamma)} \\ &= p_0(f+h) + \frac{1}{2} \gamma f^2 \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(21)$$

となつて、左右両舷に働く力は等しいことから、

$$\left. \begin{aligned} P_{Left} &= P_{Right} (\equiv P_{Side}) \\ P_{Left}^{(0)} &= P_{Right}^{(0)} (\equiv P_{Side}^{(0)}) \\ P_{Left}^{(\gamma)} &= P_{Right}^{(\gamma)} (\equiv P_{Side}^{(\gamma)}) \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(22)$$

のように、それぞれ下添字 *Side* で共通表記したものである。

一方、甲板 (*Upper*) に働く力  $P_{Upper}$  は、大気圧による  $P_{Upper}^{(0)}$  のみで、底面 (*Lower*) に働く力  $P_{Lower}$  は、大気圧による  $P_{Lower}^{(0)}$  と、静水圧による  $P_{Lower}^{(\gamma)}$  の和で求まるから、それぞれ、

$$\left. \begin{aligned} P_{Upper} &= P_{Upper}^{(0)} \\ &= p_0 \cdot 2b \\ P_{Lower} &= P_{Lower}^{(0)} + P_{Lower}^{(\gamma)} \\ &= p_0 \cdot 2b + \gamma f \cdot 2b \\ &= P_{Upper}^{(0)} + 2 \gamma f b \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(23)$$

となる。

**3.2  $y$  方向と  $z$  方向の合力  $F_y, F_z$**

前節の(21),(23)式から、水平成分の  $F_y$  と、鉛直成分の  $F_z$  を求めてみると、

$$\left. \begin{aligned} F_y &= P_{Left} - P_{Right} \\ &= 0 \\ F_z &= P_{Lower} - P_{Upper} \\ &= P_{Lower}^{(\gamma)} = 2 \gamma f b \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(24)$$

のように、圧力積分による合力として、水平成分  $F_y$  は生じないことが分かる。鉛直成分  $F_z$  については、

$$F_z = \gamma \cdot (2b \cdot f) \\ = \gamma \cdot (\text{水面下の矩形の面積}) = \text{浮力} \cdots (25)$$

のように書いて、Archimedes の原理<sup>(1)</sup>が教える通りの浮力である。

### 3.3 $-\eta$ 方向と $\zeta$ 方向の合力 $F_{-\eta}$ , $F_\zeta$

$\theta$  だけ回転した座標系の  $-\eta$  及び  $\zeta$  方向に働く合力  $F_{-\eta}$ ,  $F_\zeta$  は、(21),(23)式を用いて、

$$\left. \begin{aligned} F_{-\eta} &= -P_{Left} \cos \theta + P_{Right} \cos \theta \\ &\quad - P_{Upper} \sin \theta + P_{Lower} \sin \theta \\ &= 2\gamma f b \sin \theta = F_z \sin \theta \\ F_\zeta &= P_{Left} \sin \theta - P_{Right} \sin \theta \\ &\quad - P_{Upper} \cos \theta + P_{Lower} \cos \theta \\ &= 2\gamma f b \cos \theta = F_z \cos \theta \end{aligned} \right\} \cdots (26)$$

のように、共に大気圧  $p_0$  は相殺して求まり、 $F_{-\eta}$

は浮力  $F_z$  の正弦成分、 $F_\zeta$  は浮力の余弦成分であることが分かる。

### 3.4 $o$ 点回りのモーメントの計算

$\eta$  方向に働く力による、 $o$  点回りの反時計方向のモーメント  $M_\eta$  は、(21),(23)式それぞれの力に対するレバーを、図2の矩形内の細い破線を参照して求め、乗ずることにより、

$$\begin{aligned} M_\eta &= -P_{Left}^{(0)} \cos \theta \cdot \left\{ \frac{f+h}{2 \cos \theta} - \left( b + \frac{f+h}{2} \tan \theta \right) \sin \theta \right\} \\ &\quad + P_{Left}^{(\gamma)} \cos \theta \cdot \left\{ \left( b + \frac{f}{3} \tan \theta \right) \sin \theta - \frac{f}{3 \cos \theta} \right\} \\ &\quad + P_{Right}^{(0)} \cos \theta \cdot \left\{ \frac{f+h}{2 \cos \theta} + \left( b - \frac{f+h}{2} \tan \theta \right) \sin \theta \right\} \\ &\quad + P_{Right}^{(\gamma)} \cos \theta \cdot \left\{ \left( b - \frac{f}{3} \tan \theta \right) \sin \theta + \frac{f}{3 \cos \theta} \right\} \\ &\quad - P_{Upper}^{(0)} \sin \theta \cdot (f+h) \cos \theta \\ &\quad + (P_{Lower}^{(0)} + P_{Lower}^{(\gamma)}) \cdot 0 \cdots \cdots (27) \end{aligned}$$

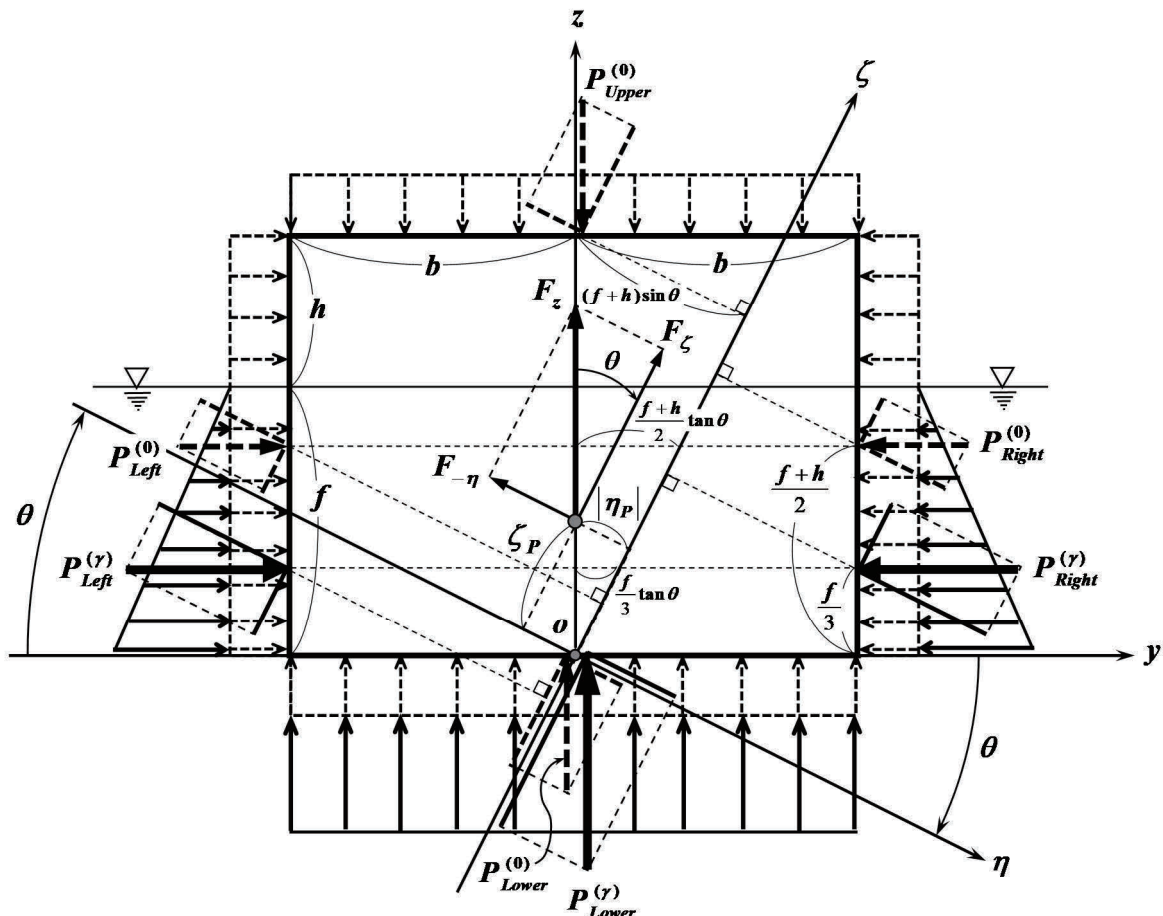


図2 直立した矩形断面に作用する静水圧の分布と座標系

のように計算できる. ここに, (22)式の関係を用いれば,

$$M_{\eta} = P_{Side}^{(0)} \cos \theta \cdot 2b \sin \theta + P_{Side}^{(\gamma)} \cos \theta \cdot 2b \sin \theta - P_{Upper}^{(0)} \sin \theta \cdot (f+h) \cos \theta \quad \dots\dots\dots(28)$$

のように整理され,  $M_{\eta}$  は,

$$M_{\eta} = p_0(f+h) \cos \theta \cdot 2b \sin \theta + \frac{1}{2} \gamma f^2 \cos \theta \cdot 2b \sin \theta - 2 p_0 b \sin \theta \cdot (f+h) \cos \theta = \gamma f^2 b \sin \theta \cos \theta \quad \dots\dots\dots(29)$$

のように求まる. 式中,  $P_{Side}^{(0)}$  に関する第 1 項と  $P_{Upper}^{(0)}$  に関する第 3 項は相殺し,  $P_{Side}^{(\gamma)}$  に関する第 2 項によって定まったことになる.

$\zeta$  方向に働く力による,  $o$  点回りの時計方向のモーメント  $M_{\zeta}$  は, (27)式と同様, (21),(23)式それぞれの力に対するレバーを乗ずることにより,

$$M_{\zeta} = P_{Left}^{(0)} \sin \theta \cdot \left( b + \frac{f+h}{2} \tan \theta \right) \cos \theta + P_{Left}^{(\gamma)} \sin \theta \cdot \left( b + \frac{f}{3} \tan \theta \right) \cos \theta + P_{Right}^{(0)} \sin \theta \cdot \left( b - \frac{f+h}{2} \tan \theta \right) \cos \theta + P_{Right}^{(\gamma)} \sin \theta \cdot \left( b - \frac{f}{3} \tan \theta \right) \cos \theta - P_{Upper}^{(0)} \cos \theta \cdot (f+h) \sin \theta + (P_{Lower}^{(0)} + P_{Lower}^{(\gamma)}) \cdot 0 \quad \dots\dots\dots(30)$$

のように計算できる. ここでも,  $M_{\eta}$  と同様, (22)式の関係を用いれば,

$$M_{\zeta} = P_{Side}^{(0)} \sin \theta \cdot 2b \cos \theta + P_{Side}^{(\gamma)} \sin \theta \cdot 2b \cos \theta - P_{Upper}^{(0)} \cos \theta \cdot (f+h) \sin \theta \quad \dots\dots\dots(31)$$

のように整理されるから,  $M_{\zeta}$  は,

$$M_{\zeta} = p_0(f+h) \sin \theta \cdot 2b \cos \theta + \frac{1}{2} \gamma f^2 \sin \theta \cdot 2b \cos \theta - 2 p_0 b \cos \theta \cdot (f+h) \sin \theta = \gamma f^2 b \sin \theta \cos \theta \quad \dots\dots\dots(32)$$

のように得られる. 式中,  $M_{\eta}$  と同様,  $P_{Side}^{(0)}$  に関する第 1 項と  $P_{Upper}^{(0)}$  に関する第 3 項は相殺し,  $P_{Side}^{(\gamma)}$  に関する第 2 項によって求まり, 大気圧  $p_0$  には依らない.

結果として, (29),(32)式から,

$$M_{\eta} = M_{\zeta} = \gamma f^2 b \sin \theta \cos \theta \quad \dots\dots\dots(33)$$

のように,  $M_{\eta}$  と  $M_{\zeta}$  は, 同値である.

### 3.5 矩形断面の圧力中心 $C_p$ の位置決め

3.3 節(26)式で求めた  $F_{-\eta}$ ,  $F_{\zeta}$  と, 3.4 節(29), (32)式で計算した  $M_{\eta}$ ,  $M_{\zeta}$  を用いて, 2.4 節と同様, 水理学の手法<sup>(17)</sup>に基づいて, 静水圧による圧力中心  $C_p$  の位置を決定する.

静水圧による  $o$  点回りのモーメント  $M_{\eta}$ ,  $M_{\zeta}$  は, それぞれ  $C_p (\eta_p, \zeta_p)$  に作用する合力  $F_{-\eta}$ ,  $F_{\zeta}$  によって,

$$\left. \begin{aligned} M_{\eta} &= F_{-\eta} \cdot \zeta_p \\ M_{\zeta} &= F_{\zeta} \cdot |\eta_p| \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(34)$$

のように計算できるから<sup>(17)</sup>,  $o$  点から圧力中心  $C_p$  までの  $-\eta$ ,  $\zeta$  方向の距離  $|\eta_p|$ ,  $\zeta_p$  は, それぞれ,

$$\left. \begin{aligned} |\eta_p| &= \frac{M_{\zeta}}{F_{\zeta}} \\ &= \frac{\gamma f^2 b \sin \theta \cos \theta}{2 \gamma f b \cos \theta} = \frac{f}{2} \sin \theta \\ \zeta_p &= \frac{M_{\eta}}{F_{-\eta}} \\ &= \frac{\gamma f^2 b \sin \theta \cos \theta}{2 \gamma f b \sin \theta} = \frac{f}{2} \cos \theta \end{aligned} \right\} \dots\dots(35)$$

のように, 決定できる.

この  $\theta$  だけ回転した座標系の  $(\eta_p, \zeta_p)$  を, 元々の座標の  $(y_p, z_p)$  に変換すると,

$$\left. \begin{aligned} y_p &= \zeta_p \sin \theta - |\eta_p| \cos \theta \\ &= \frac{f}{2} (\cos \theta \cdot \sin \theta - \sin \theta \cdot \cos \theta) = 0 \\ z_p &= \zeta_p \cos \theta + |\eta_p| \sin \theta \\ &= \frac{f}{2} (\cos^2 \theta + \sin^2 \theta) = \frac{f}{2} \end{aligned} \right\} \dots\dots(36)$$

のように計算され,



$$(y_p, z_p) = \left( 0, \frac{f}{2} \right) \dots\dots\dots(37)$$

となり、大気圧  $p_0$  に依存することなく、矩形の図心として求まる<sup>(2)</sup>。これによって、静水圧による圧力中心  $C_p$  が、周知の浮心位置  $B$  と一致することを、座標系を  $\theta$  だけ回転させることによって、証明できた。

#### 4. おわりに

第1報(矩形断面<sup>(2)</sup>)、第2報(任意の断面形状<sup>(10)</sup>)に続いて、半没円柱に対しても、静水圧の圧力中心が、周知の浮心位置(半円の図心)に一致することを、証明した。

半没円柱の場合、横傾斜させても水面下の幾何学的形状が変化しないことから、結果的に、座標系を鉛直方向からズラすように回転させることによって、圧力中心の位置決めができるという、藪下<sup>(13)</sup>の主唱を例証した。

それを踏まえて、矩形断面の場合に対しても、第1報<sup>(2)</sup>とは別の証明として、直立状態のまま、座標系を回転させる手法で、圧力中心の位置決めが行なえることも示した。

#### 謝辞

本稿のテーマに関して、幾多の有益なご討論やご教示を頂いた、防衛大学の鈴木勝雄名誉教授<sup>(14)</sup>、藪下和樹准教授<sup>(13)</sup>、舟艇協会の小松正彦評議員<sup>(15)</sup>に、篤く御礼申し上げます。

本研究を進めるに当たり、いつも身近に居て、常日頃から、温かいご激励や有益なご議論を下さった、(有)実用技術研究所の慎燦益所長<sup>(9)</sup>と、長崎総合科学大学の林田滋名誉教授に、心より御礼を申し上げ、本稿を閉じます。

#### 参考文献

(1) ARCHIMEDES : The Works of Archimedes, On Floating Bodies, Book I & Book II, Edited and Translated by T. L. HEATH, Cambridge University Press, pp.253~300, 1897.

(2) 堀 勉 : 静水圧の圧力積分による船の浮心位置の決定 — 浮心=圧力中心の証明 —, 日本航海学会誌, 第203号, pp.90~94, 2018年1月.

(3) 小松 正彦 : 浮体に働く浮力の作用中心に関する考察, 舟艇技報, No.93, pp.21~25, 2007年12月.

(4) 瀬戸 秀幸 : 「浮心」考 — 小松 : 浮体に働く浮力の作用中心に関する考察の再検討 —, 第14回推進性能・運動性能合同研究会, 2010年.

(5) 瀬戸 秀幸 : 浮力の作用中心に関する一考察, 日本船舶海洋工学会 講演会論文集, 第12号, pp.529~532, 2011年5月.

(6) 鈴木 勝雄 : 神説「浮心の法則」, 2011年1月.

(7) 小松 正彦 : 座標変換による浮力の作用中心に関する考察, 第19回推進性能・運動性能合同研究会, 2012年.

(8) 渡辺 倫堂 : 船体周りの圧力分布と浮心の関係に関する研究, 防衛大学校 機械システム工学科 船舶工学講座 卒業論文, (指導) 藪下和樹, 岡畑 豪, pp.1~25, 2013年3月.

(9) 慎 燦益 : 造船幾何学 — 造船設計の基礎知識 —, 第4章 排水量等計算と曲線図, 4.2 アルキメデスの原理, 海文堂, pp.125~133, 2013年2月(初版).

(10) 堀 勉 : 静水圧の圧力積分による船の浮心位置の決定 — その2 : 任意の断面形状の場合 —, 日本航海学会誌, 第205号, pp.28~34, 2018年7月.

(11) 一色 浩 : Pressure Center, 2018年3月.

(12) 藪下 和樹 : 船舶の復原及び推進性能(2018年度版), 第4章 浮力と圧力分布の関係, 防衛大学校 機械システム工学科 テキスト, pp.81~90, 2018年4月.

(13) 藪下 和樹, 日比 茂幸, 岡畑 豪 : 物体周りの圧力分布による浮心位置の同定, 第10回推進・運動性能研究会, pp.1~14, 2018年6月.

(14) 鈴木 勝雄 : 見かけの浮心について — 堀論文<sup>(2)</sup>に関連して —, 2018年4月.

- (15) 小松 正彦：浮体に働く浮力の作用中心に関する考察（続報），舟艇技法，第 136 号，pp.12～18，2018 年 12 月．
- (16) 堀 勉：「浮体静力学」の基礎理論に対する新展開 — その 1：「浮心＝圧力中心」の証明 —，舟艇技法，第 135 号，pp.1～10，2018 年 9 月．
- (17) 大串 雅信：理論船舶工学（上巻），1.3 浮力の例題，海文堂，pp.4～5，1971 年 6 月（初版）．

---

平成 31 年 2 月 8 日 投稿



ホリ  
堀 ツトム  
勉

正会員 長崎総合科学大学 工学部 船舶工学コース 教授（☎851-0193 長崎市 網場町 536）  
E-mail : HORI\_Tsutomu@NiAS.ac.jp, HomePage : <http://www.ship.nias.ac.jp/personnel/horiken/>  
1987 年 大阪大学 大学院 工学研究科 造船学専攻 博士後期課程 修了，工学博士  
所属学会：日本航海学会，日本船舶海洋工学会の各会員； 研究テーマ：水面波動力学

日本航海学会誌 NAVIGATION

平成31年4月 第208号

APR 2019 No. 208

追悼

故 日本航海学会元会長 東京商船大学名誉教授 庄司 和民 (しょうじ かずたみ) 先生…………… ( 1)

巻頭言

主務幹事雑感 / Miscellaneous Impressions from Competent Manager…………… 南 清和 / Kiyokazu MINAMI … ( 2)

特集

操船シミュレータ研究会特集号に寄せて / Foreword for Feature Articles on the Ship-handling Simulator Committee…………… 内野 明子 / Akiko UCHINO … ( 3)

インストラクター技能養成のためのモデルコース / Model Course for Instructors of Maritime Education and Training Certified by Class NK

…………… 操船シミュレータ研究会 / Ship-handling Simulator Committee … ( 4)

船舶の自律化システム開発に向けての提言 / Issues on Full-Automation of Ship Handling…………… 小林 弘明 / Hiroaki KOBAYASHI … ( 30)

事業所紹介

海上交通センターの業務と機能等について / The services and the functions of Vessel Traffic Service center

…………… 海上保安庁交通部航行安全課 / Japan Coast Guard Maritime Traffic Department Navigation Safety Division … ( 44)

株式会社 MTI の紹介 / Introduction of MTI Co., Ltd. ……………… 安藤 英幸・柴田 隼吾 / Hideyuki ANDO and Jungo SHIBATA … ( 51)

研究室紹介

日本大学法学部 商法・海事法研究室 / Nihon University, College of Law The Laboratory on Commercial Law and Maritime Law…………… 南 健悟 / Kengo MINAMI … ( 55)

研究・調査

静水圧の圧力積分による船の浮心位置の決定 — その3 : 半没円柱に対する証明 —

/ A Positioning on Ship's Centre of Buoyancy Derived by Surface Integral of Hydrostatic Pressure — Part 3 : The Proof for Semi-submerged Circular Cylinder —

…………… 堀 勉 / Tsutomu HORI … ( 60)

報告

海事三学会合同シンポジウム 海事分野におけるイノベーション / A report of the 4th Joint Symposium of JASNAOE, JIME and JIN Innovation in Maritime Industry

…………… 國枝 佳明 / Yoshiaki KUNIEDA … ( 69)

日本航海学会論文集 Vol. 139 (2018) 目次…………… ( 73)

事務局だより…………… ( 75)

投稿要領…………… ( 77)

日本航海学会

Japan Institute of Navigation

c/o Tokyo University of Marine Science and Technology, 1-6, Etchujima 2, Koto-ku, Tokyo, 135-8533 JAPAN